

相互啓発実践型地域研究としての京都大学国際交流科目 「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」 現地スタディー・ツアー報告

安藤和雄¹⁾、坂本龍太^{1,2)}、石本恭子¹⁾、谷悠一郎³⁾、木下広大⁴⁾、
高島菜芭⁵⁾、高浜拓也⁶⁾、福田 睦⁷⁾、宮本明德⁸⁾、諏訪雄一⁴⁾、
長澤勇貴⁷⁾、森田椋也⁸⁾、柳原志穂⁴⁾、酒井 肇⁷⁾

- 1) 京都大学東南アジア研究所
- 2) 京都大学白眉センター
- 3) 京都大学大学院農学研究科（学生）
- 4) 京都大学文学部（学生）
- 5) 京都大学法学部（学生）
- 6) 京都大学経済学部（学生）
- 7) 京都大学総合人間学部（学生）
- 8) 京都大学農学部（学生）

2014年8月30日～9月14日にかけて京都大学学生11名、職員3名の計14名が、ブータン東部を訪問した。タシガン県に立地するブータン王立大学シェラブツェ校（カレッジ）でブータンの歴史、ディグナム・ナムザ（ブータンの礼）、踊りの授業を受けた後、4名のシェラブツェ・カレッジ学生と共に畑作地帯カリン及び水田地帯ラディにおいて、臨地研修、体験学習を行った。役場、農業・畜産・森林普及センター、保健所、寺院などを訪問した他、現地の家々を訪ね、村人から話を聞いた。標高約900～3800mまでの範囲を移動する中で、気候・植生・生業形態のダイナミックな変化に直に触れ、農村で進行する過疎、医療の現状、現地に伝わる女神アマジョモ、男神ダンリン、僧侶ギャルセ・ガナパティなどの話に耳を傾けた。復路にはシェラブツェ校を再訪し、京都大学学生が朝の学生集会で臨地研修の成果について発表し、スタディー・ツアーである臨地研修・体験学習に参加した京都大学とシェラブツェ・カレッジ学生とのワークショップを行った。両大学の学生の相互理解を深めるために発表とワークショップは英語で実施された。特に、臨地研修・体験学習による共同生活を通じて両大学の学生は交流を深めた。本報告は、このスタディー・ツアーで各個人が出会ったもっとも印象に残った事実とその理由をもとに参加した感想を綴ってもらった記録集である。スタディー・ツアーは実践型地域研究が目指している相互啓発による参加型地域研究の一つの試みでもある。また、研究者とは異なる京都大学の学生という「当事者的視点」からのシェラブツェ校の教育、学生との数日の生活から垣間見ることができた文化や宗教などの地域の伝統文化に対するブータンの若者の考え方や接し方などに関する日本との比較論としても読むことができるユニークな相互啓発実践型地域研究の報告書となっている。報告書の各編は以下のとおりである。はじめに：国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の背景と目的及び本報告の意義（安藤和雄）、世界一幸福な国であり続けるために（木下広大）、ブータンにおける二週間のフィールドワークで感じたこと（高島菜芭）、今までの、そしてこれからのブータン（高浜拓也）、ブータンと日本を比べて（福田 睦）、私とブータンの旅（宮本明德）、ブータンの自然と宗教（諏訪雄一）、秘境を訪れて（長澤勇貴）、ブータンの離農・離村問題について（森田椋也）、自分と向き合う16日間（柳原志穂）、ブータンへの初渡航（酒井 肇）、ブータンの農村における過疎と景観への影響（谷悠一郎）、おわりに：自然の教材に触れて、生活を共にする（石本恭子）、ブータンを体感する科目を（坂本龍太）

I. はじめに—国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の背景と目的及び本報告の意義

東南アジア研究所実践型地域研究推進室室長
(准教授) 安藤和雄

京都大学は1～2回生を中心に学部学生を対象として国際的な視野を現場で体験的に学んでもらうために国際交流科目を実施している。本報告は2014年度実施された国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」に参加した学生たち、教職員のブータンでのフィールド・スタディーに参加した感想である。本報告をまとめるにあたって、参加学生たちに求めた内容は、強い印象を受けた事実を書きこむことと、その感想であった。学生たちが強い印象を受けた事実は、ブータンの自然や暮らし、接した人々の人柄、過疎・離農問題、等々であるが、中でも、私たちを受け入れ、スタディー・ツアーに同行し、通訳などに協力してくれたブータン王立大学シェラブツチェ校(以下、シェラブツチェ大学あるいは、シェラブツチェ・コレッジと記す)の学生たちが見せた舞踊、チベット仏教教養などの自国文化の伝統をしっかりと受け継いでいることや、英語能力の高さ、保健・農村開発等々の実態であり、そこから日本人としての日本文化の伝統、アイデンティティや、日本が抱えている過疎・離農問題などを反省したのであろう。

一方、京都大学は、2013年度より、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)である「KYOTO未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成」地域志向教育研究経費(京都学教育プログラム)」を5年計画で開始した。「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の目的は、「大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図る」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ 2014年10月31日アクセス)とされている。現在日本の農村部、特に中山間地の村々で深刻度を増している過疎・離農の問題は、日本ではすで

に1970年代には顕著となっていたにもかかわらず、問題の複雑さ故に、決め手となる対策がうたれることなく現在に至っている。京都府でも同様であるといえるだろう。人口は都市部にますます集中し、いつの間にか中山間地の過疎・離農の問題はマスコミなども取り上げる機会が減少し、一般の人々、特に、都市住民の日常的な関心事の外に置かれていった。京都大学で学ぶ学生の圧倒的多数は都市部の出身者であり、学生たちにとって、農村部における過疎・離農の問題は「遠い問題である」と言えよう。私は学生たちに過疎・離農の問題を「自分たちの問題」として捉えてもらうことが「地域で学ぶ」ことの火急の今日の問題であると思っている。そして、地域の人々が共通する問題群に直面し、それを克服しようとしている地域として日本と海外をつなげ、問題に対する当事者の意識を共有する主体が行う相互啓発実践型地域研究を参加型地域研究として実践したいという願いを絶えず抱いてきた。その機会が得られたのが、「地(知)の拠点整備事業」への参加であった。ブータンに学ぶことでこの問題を「自分たちの問題」として捉えてもらいたいというのが、「地(知)の拠点整備事業」の一環としての国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」を相互啓発実践型地域研究の試みとして企画した私の意図と期待でもあった。

私は1991年頃から2014年の現在まで、様々な機会を得て、京都府、滋賀県、山口県、高知県の農村部を訪問、調査してきた。日本の農村、特に、中山間地の農村では、過疎化、少子高齢化、耕作放棄地に顕著な農業離れ、の諸問題が顕著で、その問題の深刻さに驚きの連続であった。私はバンラデシュ、ミャンマー、ラオス、雲南、ブータン、東北インドの農業・農村開発と日本の地域再生問題を、それぞれ専門とする地域研究に携わってきた関係から、これらの国々を中心に、海外から東南アジア研究所へ共同研究者を招へいし、その都度、京都府の中山間地の視察を実施してきた。海外からの招へい者の視察時の感想や地域住民の反応から、日本の過疎・離農の問題にはこれをアジア的な問題として位置づけ、そこから対策の糸口を発見することが有効であるということを強く意識するようになっていた。海外の人々からの声に日本の農村部の住民の人々は率直に耳を傾け

た。また、海外の人々は帰国する頃には、自国農村の将来のあり方に経済開発だけでは十分ではないということを実感に考えるようになっていた。私は海外からの招へい者と日本の農村を視察するようになって、それぞれの国の異なる文化、歴史、制度をもつ地域の問題に接する経験を活かし相互啓発する地域研究が、こうしたやっかいで困難な共通する問題（グローバル問題群と呼ぶこともできるだろう）を解決していくためには有効な地域研究の手法となることを確信するようになった。京都府の地域に学ぶことは、地域内のみ学ぶのではなく、地域を超えた、地域外との相互啓発的に学ぶという手法が有効であるという考えによって、2012年度に京都大学の「地（知）の拠点整備事業」企画募集があった時に、この問題を実感し、過疎・離農の問題をアジア的視点で理解し、相互啓発的に克服していこうとしている地域の人々への支援プログラムに参加することこそが京都府の地域から学ぶことであるという考えにより、海外、特にアジアでの地域研究の経験を生かした「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」を東南アジア研究所実践型地域研究推進室の事業の一つとして応募し採用された。国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」は「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」の一つのプログラムとしても実施されたのである。特にブータンがスタディー・ツアーの地として選定されたのは、安藤、坂本が「人の生老病死と高所環境―「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」（奥宮清人代表2008－2014年度）に参加し、東ブータンでフィールド医学や実践型地域研究の共同研究を保健医療機関や大学と実施してきた経験があったこと、2011年には東南アジア研究所とブータン王立大学シェラブッチェ校（Collegeなので以下、シェラブッチェ大学もしくはシェラブッチェ・コレッジと表記する）との間に学術協定が結ばれ、この年から安藤はシェラブッチェ大学の共同調査を開始し、東ブータンの過疎・離農の実態を、今回のプログラムで訪れたカリン行政村（Khaling Gewog）で、シェラブッチェ大学のカウンターパートの協力を得て理解するようになったからである。2013年度には、7月と2月に、シェラブッチェ大学から若手研究者をそれぞれ4名ずつ京都府南

丹市美山町知井振興会の協力を得て佐々里集落で集落に宿泊して参加型農村学習と実践を通じた調査（Participatory Learning and Action, PLA）を実施した。シェラブッチェ大学との学術協定に基づいたプログラムの一環としても本スタディー・ツアーが企画・実施されたのである。

経済発展のグローバル化に伴い、ヒマラヤの高所の村々ではブータンに限らず、過疎・離農は、現在、あるいは近い将来「深刻な問題」となってくるに違いない。この問題は、もはや一国、一地域が抱える問題というよりは世界が取り組まなければならないグローバル問題群の様相を呈しているのである。そういう観点からも過疎・離農の問題解決に向けた国際的取組は急務であり、日本の果たすべき役割は決して小さくはない。特に、日本の若者がこの問題とどう向かい合っていくのかが問われていくことになるだろう。ブータンの国民総幸福量（Gross National Happiness, GNH）政策や過疎・離農の現状をしっかりと現場で見つめ、日本の現状に思いをはせることはこの問題に対する何らかの自覚を参加学生に芽生えさせてくれたことだろう。

参加学生の報告を受けて、今回のスタディー・ツアーの成果としてこの問題以外に地域研究の手法の開発にも大きな手ごたえがあったと私は感じている。自らの姿は鏡に映してはじめて認識することができるように、シェラブッチェ大学の若手研究者は美山町を通じて、京都大学の若者はブータンを通じて、それぞれの対象地域を理解するとともに、自らの地域を理解することになったことだろう。参加型の相互啓発実践型地域研究の目的は対象の理解にとどまらず自らの地域を理解し、理解することで地域の問題を発見し、問題理解や解決への実践の自覚が生ずることである。本報告は、研究者とは異なる京都大学の学生という「当事者的視点」からのシェラブッチェ大学の教育、学生との数日の生活から垣間見ることができた文化や宗教などの地域の伝統文化に対するブータンの若者の考え方や接し方などに関する日本との比較論としても読むことができるユニークな参加型の相互啓発実践型地域研究の成果報告書ともなっている。

参加学生たちの報告から私は本フィールド・スタディーが当初の目的を十分に果たしたと自負し

ている。実費参加してくれた学生、国際交流科目担当関係者、教職員、業務旅行株式会社関係者、シェラブツェ大学、カリン、ラディの行政村の村長他の住民の方々、現地旅行代理など、今回のスタディー・ツアーを支え、お世話いただいた皆さん、また、本報告の掲載の機会を与えてくださったヒマラヤ学誌の編集委員会に記して感謝したい。

Ⅱ. 行程

- 8月30日(土) 午後関西国際空港出発、バンコク泊
- 8月31日(日) バンコク出発、パロ到着後、ティンブーへ。ティンブー市内見学
- 9月1日(月) ティンブーよりブムタンへ移動
- 9月2日(火) ブムタンよりタシガンへ移動。途中、ウラのBHU(保健所)を見学。
- 9月3日(水) タシガンゾン(タシガン県の県庁)にて県知事(ゾンダ)の表敬訪問および見学。カンルンにあるシェラブツェ大学に移動。
- 9月4日(木) シェラブツェ大学の朝礼(アセンブリ)で訪問団より発表。大学で講義を受ける。午後よりヨンプラ村を見学。
- 9月5日(金) カリンへ移動。カリンにてBHUおよび機織りセンターを見学。夕方に、Yesel Chrin ラカン(寺院)を見学。
- 9月6日(土) カリン滞在。農業センター、ジャルン・ハガンを見学。午後よりグループに分かれて村落調査。
- 9月7日(日) ラディへ移動。途中で寺院を見学。
- 9月8日(月) ラディ滞在。ラカン、BHU、学校を見学。午後よりグループごとに村落調査。夜に行政官より、ブータンの過疎の現状についての報告をしていただく。
- 9月9日(火) ラディよりタシヤンツェへ移動。チョルテン・コラ(仏塔)を見学。午後より、カンルン、シェラブツェ大学に移動。

- 9月10日(水) 朝、シェラブツェ大学の朝礼にて国際交流課目での感想について発表。その後、ミーティングおよび学生・教員を交えたワークショップを実施。モンガル泊。
- 9月11日(木) モンガルよりティンブーへ移動。
- 9月12日(金) 出国。バンコク泊
- 9月13日(土) 深夜バンコクより出国
- 9月14日(日) 朝、関西国際空港に帰宅。

Ⅲ. 参加学生たちの学び:強く印象を受けた出会いの事実、感想、考察

本節では参加した学生(学部生10名、大学院生1名)の国際交流科目を通して得た事実との出会い、それに対する感想、考察を掲載する。

1. 世界一幸福な国であり続けるために

文学部1回生 木下広大

1) はじめに

僕は今回のブータン研修を通して深く考えさせられたこと、感じたこととして、ブータンという国の実像を肌で感じる事ができたことについて語りたい。

2) 憧れの国、ブータン

僕は以前からブータンという国について憧れを抱いていた。独特の様式をもつチベット仏教が生活の隅々まで染み渡り、果てしなく雄大な高度3000mを超える山々の大自然の中で美男美女の国王夫妻の元、みんなが幸せに暮らす国…。いつかその地に足を踏み入れたいと思っていたのもあり、この研修に応募した。

今回の行程で僕たちは最初に首都ティンブーを訪れ、徐々に東の農村地帯へと進んでいった。初めてこの国の景色を見たときの感動は忘れられない。話に聞いていた通りの大自然の中、独特な作りの家屋が立ち並んでいた。人々は民族衣装であるゴとキラを身にまとい、誰もが穏健そうな笑顔を見せている。全く持って自分の想像していた通りのブータンがそこにあった。けれども、当然といえば当然のことであるが時間を過ごすうちにだ

んだんと自分のイメージとは少し違うとを感じる場面に出会うことが多くなった。

3) 現代ブータンの実像

ティンプーでは民族衣装であるゴヤキラを着ていない人も多く、いたるところに携帯電話や洋服を売る店が立ち並び、西洋や日本と変わらないような生活様式が当たり前になりつつあるのがよくわかった（写真1）。一方今回の旅の目的地であった東部のカリンやラディの村ではほとんどが伝統的な宗教的で農業中心の生活を営んでいるようだったが、村の行政を担当する Gup（住民の直接選挙で選ばれた行政村の村長）から見せてもらったプレゼンや農家や田畑の見学を通してその生活も近年は都市部への人口流出や離農の影響で人手が不足し、維持するのが困難になってきているという現状を知り衝撃を受けた。

道中ではインド人労働者と見受けられる男たちがいたところで道路を整備しているのが見受けられ、ブータン人を見ることは少なかった。聞くとブータンでは若者のこういった重労働離れが深刻化していると聞いた。

立ち寄らせてもらった小中学校では英語教育の徹底さを見せ付けられた。僕たちが見学したのは小学校3年生の授業だったのだが、そのすべてが英語で執り行われていて、母語であるゾンカはそれ専門の授業以外では全く使われていないのだという（写真2）。交流したシェラブツェ大学の学生はもちろん、ブータンの若い世代はみな英語が堪能だ。それはひとえにこの徹底した幼いころからの英語中心の教育によるものである。われわれ英語のできない日本人も見習わなければいけないと思う反面、この英語に偏った教育により、若い世代でもともとブータンで使われてきたゾンカ語が読めないという人が多い、と問題視される部分もある。現に今回同行させてもらったガイドの一人は英語が堪能だが、ゾンカ語を読むことができなかった。極端な例では祖父母の代と言葉が通じないという人すらいるようだ。

4) 世界一幸福な国であり続けるために

「世界一幸福な国、ブータン」。ブータンにとくに造詣の深い人でなくても、たいていの日本人はブータンといえば、昔の日本みたいなどこか牧歌

的で平和でみんな幸せ…という認識でいると思う。その認識は決して間違いではない。道行く人、出会う人、みな親切で世話焼きで、どこにいてもとっても素敵な笑顔で僕たちを温かく迎えてくれた。しかし、その「幸福」の土台となるものは今、案外もろい状態にあるともいえる。上に書いたように、今までブータンを支えてきたかつての伝統様式、生活習慣、宗教観念…そういったものがいまや薄れ、新しい時代の波に飲まれようとしている。とはいえ、このままブータンの持つそういった大切なものがなくなってしまうのを止められないわけではない。ブータンはまだまだ発展途上である。これからの発展の仕方それ次第でどうとでも変わることができるはずだ。また、ブータンが抱える離農や過疎などの問題は遠い世界の話ではなく、ここ日本でも同様の問題が起きていることを見逃してはならない。言い方を変えれば、同じ問題を抱えるもの同士、日本とブータンで協力し合うということができるともいえる。日本が発展する中で積み上げてきた功罪は、今後ブータンが発展する上において一つの指標として少なからず役に立つだろう。日本からの技術や資本による援助もできる。反対に、ブータンから日本が学ぶべき、見習うべきものもある。今回私たちが見て回った、各村に国が設置する無料の保健機関かつ医療機関である BHU（行政村内に設置されている保健所）などがその好例だ。

そして、今私たちにできることとして、まずはこうやってブータンという国の実情をしっかりと見て、聞いて、感じて、知ることが大切だと思った。ブータンは単なる「幸せの国」ではない。未来永劫「幸せの国」であり続けられるよう、たえず努力し続けなければいけないのだ。今回の研修でそのようなことを肌で感じる貴重な機会を得られたことを本当にうれしく思った。この研修でお世話になった全ての人たちに心から感謝したい。そしていつかまたこの足でブータンの地を訪れる日を楽しみにしている。

2. ブータンにおける二週間のフィールドワークで感じたこと

法学部1回生 高島菜芭

1) はじめに

今回初めてブータンに行き、文化の違いに戸惑ったり、体調を崩したりするなどハプニングもあったが、自分の中でかなり価値観も変わり、大変有意義な旅だった。特に日本との差異が顕著だった点、印象の強かった点について以下にまとめていこうと思う。

2) ブータン人の恋愛観について

ブータン人、特に男性は恋愛に関して日本人よりも断然積極的だと感じた。日本人男性が初対面の女性にはシャイであるのに対して、ブータン人は全くためらわずに話しかける。最初はカジュアルな話から始める。大変フレンドリーで話しやすい。話題も豊富で話していて飽きず、いつの間にかペースをもっていかれてしまう。仲良くなってくると、会話のところどころに褒め言葉を入れて来て、特に嫌がらない様子でいると、このへんから調子に乗り始め、容赦なく下ネタもぶっこんでくる。「今夜君のところに夜這いに行くね」という軽い具合に。(ブータンには夜這いの文化がある。) またターゲットがとにかく広い。老若、美醜にあまりこだわらない。出会う女性全員口説き始める人もいるくらいだ。日本ではこういういわゆる“チャラ男”はまれとされているが、ブータンではわりと普通のことなのである。実際、地味そうな男性でも初対面からががんと話しかけてくる。女性の方も然りで、ブータン人女性が積極的に男性とコミュニケーションをとっているのを見て大変感心させられた。しかし極端なケースでは会って数時間なのにボディータッチが激しかったり、巧みな手口で女性を呑みに誘い、泥酔したところを襲うというケースもあるらしいので、注意したいところだ。

3) 現地の若者について

私達日本人の若者との差異において一番大きいのは自国の伝統文化、歴史に精通していて、それらを愛し、誇りに思っていることそして、アイデ

ンティティが確立しているということだと感じた。ブータンには、長い鎖国期間があったからこそ独特の文化がある。言語、宗教、迷信、芸術、音楽、ダンス…それらは今もお健在し、若者がしっかり伝える担い手となっている。ある有名なお寺を訪問したとき、共に訪問したブータン人大学生の女の子がそこに祀られている神々について詳しい説明してくれた。また現地の大学生との交流会において現地学生が素敵なブータンのダンスを披露してくれたが、とても繊細で優雅だったのにもかかわらず、後でどれくらい練習したのか聞いた時に「前日ちょっとしかやってないの」と言っていたのは、普段からそのような伝統的ダンスに慣れ親しんでいるからであろう。またほとんどの訪問した家、レストランなどにおいて国王、王妃のポスターが貼られていた。実際、ブータンの大学生に幸せかどうか尋ねてみると、「ブータンほど良い国は無いよ。いくつかの外国を訪問したけれど、私はこれからずっとブータンに住みたい。これほど自然があふれていて、国民が幸せな国はないもの。自分達の文化を本当に誇りに思っているわ。」と述べていた。

英語の普及によるゾンカ語の退廃(大学のほとんどの授業は英語で行われ、友達との会話にも時々英語を使用すると言っていた)、農村部と都市部の格差から生じる農村部の人口流出(交通機関や病院などの整備が都市部に比べて不足していることによる)などさまざまな問題を抱えてはいるものの、若者が主体となってこれらの問題を解決しようと試みていた。カリンの林業・畜産業・農業センターに務める21歳の男性は、自ら「コンタクトファーマー」という農業技術普及のための制度を思いつき、実行していた。また、地元の学生が「social service unit」というものを立ち上げ、寄付金を募って、荒廃した農村での家屋の修理などを行っているというのも聞いた。個人的には、ともに四日間を農村部で過ごした大学生の女の子がインド人の貧しい労働者たちに自主的にお菓子を配っていたのにも深く感銘を受けた。ブータンの若者達の主体性を私も見習っていきたい。

4) おわりに

今回、ブータンに行って、国の発展の新しい方向性を学ぶことができたように思う。日本は今ま

で経済発展にばかり尽力してきた。もちろん経済という側面は国民の幸福度を上げるという点において重大な役目を果たしているが、ブータンのように国民の幸福度という観点を直接考えた政策を導入してもいいのではと思う。

そして、これからも日本・ブータン両国が互いに協力しあって、過疎などの問題に対処していくことが重要だと思った。

3. 今までの、そしてこれからのブータン

経済学部1回生 高浜拓也

1) はじめに

幸せの国、ブータン。ブータンは確かに幸せの国だった。秘境の名にふさわしい、山々が織りなす雄大な大自然。旅人をあたたかく迎える、各地の人々。脈々と受け継がれ、学び手をひきつけてやまない文化。すばらしい国だった。しかし、その一方で、ブータンは自国独自の、あるいは途上国や日本に共通の、さまざまな問題を抱えている。私自身が関心を持っている文明と自然の共存、国民国家とグローバル化の関係、という観点から、今回はブータンの自然、文化、そしてまとめとしてこれからのブータンの国づくり、この3点を簡単にまとめる。

2) ブータンらしい自然のあり方

ヒマラヤ山脈の一角をなすほどの雄大な山岳地帯を有するブータンでは、その地理的条件、気候・地勢的多様性のため、生態系が極めて豊かであった。車での道中も周囲の植生の変化を何度も観測できた。その中で、問題もある。交通インフラの脆弱性である。今回の研修では、空港から目的地にたどり着くまで、車で約3日間もかかった。その間、首都のティンブーなどはともかく、整備の遅れた東ブータンでは、今にもがけ崩れしそうな壁面を横目に、1.5車線ほどの幅の未舗装の山道が永遠と続く。時折出会う対向車には、お互いが道路の両脇によることで、ぎりぎりかわすという状況である。このような運転に慣れた現地ドライバーの注意力和技術によるところがきわめて大きいと感じた。工事中ということで一時的に道路が封鎖され、立ち往生したことも何度かあった（写

真3）。この現状では、まず、救急患者の搬送が長時間かかり、患者が危険にさらされること、自動車でのアクセスが不可能な集落において、輸送コストの高さから産業の発展が阻害されること、そして、商業・観光業の活発化で交通が盛んになっていく中で、衝突・がけ崩れなどの交通事故が多発する可能性が高いこと、というように様々な問題があると考えられる。塩見（2012）も交通需要の増加に追い付いていない交通整備の危険性を指摘している¹⁾。この解決を目指すうえでネックとなるのは、ブータンの守るべき自然である。自然を一つの大きな観光資源にする限り、交通の時間短縮や安全のため、山にトンネルを大量に掘削して軌道系交通機関を建設することや、山を切り崩して車線を広げるということは、自然保護の観点から厳しいのではないかと。そしてまた、ブータンが自国の「秘境」性を今後もアピールポイントにする場合、交通網を整備して、どこでも手軽に素早くいけるという状況になることが、果たしてブータンにとって本当に良いのかという疑問も残る。個人的な意見であるが、何日も険しい山道の中で車に揺られ、やっとたどりつく場所だからこそ、秘境としての価値を感じる。これらを踏まえると、空路の面での充実が急務ではないだろうか。地域レベルで、緊急の搬送用としてのドクターヘリや、地方―都市間での食料・生活用品運搬用のヘリの導入が考えられる。実際、日本の多くの山岳小屋ではヘリでの輸送が一つの手段として確立しつつある。ただ、そうなると、今度はコストの問題が浮上するし、少しの空路の充実では交通需要の急増に対する根本的な解決にはなっていないということもある。結局、空路はあくまで一つのオプションとして、陸路をどれほど、また、どのように充実させるかという問題になるが、悩ましいところである。秘境としてのブータンの維持か。近代国家としてのブータンを目指すのか。国民が、ブータンをどのような国にしたいかという想いに依るところが大きい。

3) ブータンらしい文化のあり方

続いて、文化。長い間続いた鎖国時代を経て、ブータンは今、急激な国際化・近代化に向けて動いている。その典型が幼少時からの充実した英語教育である。現地の小学校において、歴史と母国

語（ゾンカ語）の授業以外はすべて英語で行っているという話を聞いて驚愕であった。授業では、日本で小学3年生に相当する学年の子供たちがすでに英語で本を読んでいた。国民、特にしっかりと教育の機会を与えられた若者層、の英語力という観点からは、日本など足元にも及ばない。ただ、国際化は、明治維新期の日本がそうであったように、恩恵と同時に、さまざまな課題ももたらす。英語教育の充実や西洋近現代文化の流入によって、ゾンカ語を満足に読み書きできない若者が出てき始めていることや、ブータン固有の伝統文化が失われかけていること、将来、自国を背負うべきエリート層がさまざまな動機から海外に流出してしまっていることなどが起きていると、現地にて伺った。「ブータンの東大」とも言うべき、将来のブータンを担うべきエリート学生が集うシェラブツェ大学の生徒のなかにも、将来はブータンを離れニューヨークで働く決めていた人がいた。これらはグローバリゼーションと国民国家の関係において、避けられない問題の一部だと思う。シンガポールは、文化や歴史、民俗といったものにこだわらず、商業国家としての独自のアイデンティティを新たに形成することに徹した。インドはブータンの国際化の延長線上にあると言われ、英語ばかり学んだ若者が、現地語しか話せない地元の高齢者とコミュニケーションがとれないといった問題が起きているというように、すでにこれらの問題が深刻化しているという。「ブータンにはこんな風になってほしくない」というインド人の声も聞いた。日本は、大量に流入してくる外国文化を、日本にとって適切な形に加工したり、適切なものだけに限定して消化吸收したりという当時の文化人の血のにじむ努力の結果、日本語の存続や自力での文明発展に成功したものの、西洋文化の隆盛に伴う伝統文化の衰退という問題は未だ解決されていない。また、個人主義、成果実力主義といった欧米の価値観の浸透の影響もあって、人と人の支えあいの精神、おもてなしの精神、思いやりの精神といったものが失われてきているという感覚も個人的にはある。ブータンは全国を通して極めてブータン仏教に敬虔で、同行したシェラブツェ大学生やガイドは、行く先々のラカン（寺院）において驚くほど深く、広く、仏教の話をしてくれた。仏教はブータンの幸せの源泉の

一つとして大事な文化なのだと、彼らから聞いた。また、ラディでは、出発前夜、旅人のもてなしの文化として、現地の若者たちが私たちに伝統のダンスを教えてくれ、皆で踊るという経験もした（写真4）。印象的だったのは、そのとき、同じブータンの中でも出身の異なる現地ガイドの人たちも、その踊りを踊れたということである。ブータン全体を通してダンスが共通しており、このような場ではいつも、旅人・現地ガイド・地域住人がダンスを通して絆を深めるという。どちらも、日本にはない、あるいは失われた、素敵な文化である。どんな文化を捨て、あるいは保ち、どんな文化を受け入れるのかを選ぶことはブータンにとって重要になるだろう。

4) おわりに

最後に、これからのブータンの国づくりについて。上述のように、ブータンは世界のグローバル化という波の中で、自身も国際化に向けて大きく舵を切りはじめ、その恩恵とともに新たな多くの課題にも直面している。その切り抜け方には、日本・インド・シンガポールなど、成否ともに多くの前例がある。それらの国々がどんな背景の中でどんな方法をとった結果、どんな状態をもたらしただか。それはブータンにとって望ましいものか否か。国際化をきっかけに、ブータンは今、自分の国の在り方についてどんな国を目指したいのかということ国民全体で再考し、しっかりとしたヴィジョンを立て、国を担うリーダーとしての人材を筆頭に、国全体で一丸となってそこを目指す、そんな時期に来ているのだと思う。繊細で、かつ大胆な作業である。細心の注意を払って、毅然として、進んでいってほしい。ナショナリズムとグローバリズムがせめぎあう中で、ブータンがこれからどんな国になっていくのか、楽しみである。そしてこれは、日本にとっても他人事ではない。伝統文化の復興、移民問題、観光産業の活性化、日中韓の政治的緊張など、様々な分野において、国際化の中での日本の在り方、立ち位置というものが問われている。ブータンと日本、同じ悩みを持つものとして、私たち若い世代が、より深く手を携えてこれからを担っていかねばならない。最後の最後となったが、私たちにこのような貴重な体験をもたらしてくれたすべての方々に心から感



写真1 発展の著しい首都ティンプー



写真2 小学校の英語教育



写真3 工事中の道路



写真4 ラディにて披露してもらったブータンの伝統的な踊り



写真5 ブータンのトイレ

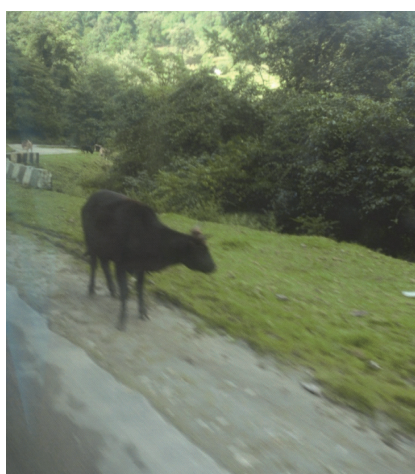


写真6 道路を闊歩している牛

謝の意を表する。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 塩見康博：「幸せの国・ブータンの交通事情とその展望」, 運輸政策研究 14(4): 43—48, 2012.

4. ブータンと日本を比べて

総合人間学部 1 回生 福田 睦

1) はじめに

私は2週間の研修に参加して、ブータンと日本の違いを伝統保護、宗教、教育、衛生、交通の面で感じブータンの良い面とそれを脅かす問題およびそのような問題を何とかしようとする人々の努力の両面を少しずつではあるが見ることができた。

2) 伝統保護の違い

反省会で多くの京大生が言っていたように、ブータンの学生は伝統の歌やダンスをしっかりと受け継ぎ、日本人に披露したり教えたりすることが出来ていたが、私たちは日本の伝統文化を伝えることが出来なかった。ブータンの学生を見ていて、世代を超えて分かち合える文化があり、みんなで楽しい時間を共有できる幸せを知った。また、彼らが自分たちの文化を誇りに思っていることが伝わってきて羨ましく思った。学生たちはブータンの将来について聞かれた際に、伝統を守りながら発展していきたいと答えていて、彼らが自分たちの文化の大切さを分かっている、かつ国の将来を担う高い意識を持っていることが感じられた。

3) ブータンの仏教

ブータンでは多くの人が寺社に訪れてお祈りしていて、BHU やお店の壁などの至るところに仏教に関するポスターや絵画が貼られていて、マニ車やルンタが町の中だけでなく山道にもあった。私が一番驚いたのは同じ世代の学生が皆、家庭で親からチベット仏教について教えられていて私たちに詳しく説明出来たことだ。大学のアセンブリー（朝礼、朝の集会）でのご祈祷も厳かで、歌声も美しかった。学生がみんな真剣な態度でアセンブリーに臨んでいることに感動した。ブータン

ではチベット仏教が人々の生活に密着し、かつ人々の心の支えになっていることが分かった。

4) ブータンの教育

朝の散歩やフィールドワークで現地の学校を訪れることができた。学生たちのゴヤキラの姿はとても素敵で、私たちに笑顔で手を振りかえしてくれた。学校や道で子供たちに話しかけたり、売店で女の子に通訳してもらったりしたが、子供たちの英語力の高さには本当に驚いた。しかし、母語で教育を行えない弱点について安藤先生から教えていただき、さらに専門的な教育や訓練が国外のインドでしか行えないと知り、改めて日本では母語で教育が行われていることをありがたく思った。また、出発前からブータンの小学校進学率の低さや、GNH で教育に対する満足度が目立って低いことが気になっていた。現地の方々や学生に聞いたところ、都市部以外では未だに下の兄弟の世話や農作業の手伝いを子供がしなければ生活がなりたらず末っ子しか通学できない家庭や、授業料や教科書代が無償であっても制服が高価であるために購入できず子供を通学させられない家庭が多いと分かった。また、大学以外の小中高過程では私立と比べて公立の教育水準が低く不満が高いことも分かった。教育の問題は今後ブータンでますます大きな問題になってくるだろう。

5) ブータンの衛生状態

ブータンと日本では衛生面で大きな格差があった。ブータンの都市では、人々が飲食や洗浄に使用する水道水が明らかに白く濁っていたり砂が混ざっていたりすることもあった。また、トイレの管理や処理が行き届いておらず、使用できない状態で放置されているものもあった。私には何の問題もなかったが、乳児や小さい子供、お年寄りなど体が弱い人たちの健康が脅かされるのではないかと心配になった（写真5）。

6) Social Service Unit (SSU) について

シェラブツェ大学では、SSU という団体の活動を紹介していただいた。SSU では地域の水槽のタンクの掃除や仏塔の塗り替え、貧しい人々への食糧援助の他に、僧の少年たちへ英語や数学を教えたり、子供に体を洗うことを教えたりする活動や、

道路のごみ拾いもしていた。800人以上の学生が組織に関わっていると知り、驚いた。プレゼン後、代表の方に伺うと、SSUの活動内容は本来、行政や地域の人々が行っていたが、経済的な利益を追い求めるようになって行わなくなってしまったことが分かり、ブータンの抱える問題と、解決しようとする学生の努力の両面を知ることが出来た。

7) おわりに

「幸せ」で有名なブータンでも、素敵な面と問題の両方があり、発展する中でインドなどの外国との関わりで価値観が刻々と変化していることが分かった。実際にブータンを東西に移動すると、都市化が進んだ西と棚田に囲まれた東の雰囲気の違いに驚き、入国した時にはかわいい町だと思っていたティンブーが、帰りには大都会に感じられて自分の価値観が変わったと思った。実際に、ブータンの都市部と農村部では、教育・医療・商業の面で格差が広がり、農村部を離れる若者が増え、日本と同様に過疎化の問題を抱えている。しかし、シェラブツェ大学の朝礼で、安藤先生が都市部ではなく地方に優秀な大学があることに誇りをもち、GNHは彼らなしでは成立しないと学生を鼓舞するスピーチをされていて、私もスピーチに感動し、本当に素敵な大学と学生たちだと思った。学生たちは、自分の家族の幸せや国の将来をよく考えていて、学力も意識も高く、自信も感じられて、かっこよかった。今後、彼らが幸せな国をつくっていくのだと思う。

同行した京大生もまた、将来の夢が大きく、様々な面で活躍していて、素晴らしい特技があり、今後も刺激を受けられる素敵な出会いになった。

フィールドワークやトラブルの対処の仕方を学び、日本文化の勉強の必要性に改めて気づいたことは、今後に生かしたい。また私は青年海外協力隊や途上国援助にも関心があるので、実際に途上国で活動される安藤先生や坂本先生のお話を聞いたことも勉強になった。機会に恵まれ、先生方や先輩方と同回生、ブータンのスタッフの方や学生に支えていただいたおかげで、全行程に楽しく参加できた。この場を借りて心から感謝したい。

5. 私とブータンの旅

農学部1回生 宮本明徳

1) はじめに

今回、京都大学の国際交流科目でブータンに二週間ほど研修として行かせてもらった。大学1年の夏に、このような機会に恵まれたことは、本当に幸運であったと思っている。この研修で一番よかったことは、自分のこれまでの努力不足を思い知ることができたことだと思う。今回得たこの気持ちを忘れることなく、これからの大学生活を過ごしていきたい。

2) ブータンでの移動

ブータンでは日本と比べてとにかく移動が大変である。首都を除けばほとんどの道路はアスファルトの舗装はされておらず、自然保護等の理由で自然破壊につながる道路整備を行っていないため、何度も山の峠を越えなくてはならない。道路には犬や牛が悠遊と歩いており、彼らが道をふさいでいるときにはクラクションを鳴らしてわきによけるまで待たねばならない（写真6）。8月30日に日本を離れ、タイを経由して8月31日午前8時にブータンのパロ空港に到着した。その日はパロ空港から約一時間かけて首都ティンブーまで移動し、午後はティンブーを観光した。次の日からは丸二日間移動であった。思えば、この道中もブータンの雄大な自然の景色を楽しんだり、同行した教授たちと話をしたり、バスの窓から道行く人たちに声をかけたりと思い出に残るようなものであった。移動中も、9月2日にはウラ保健所を訪れたり、9月3日の午前中にはタシガンの知事を表敬したりと貴重な体験をさせてもらった。3日の午後4時ごろに、ようやく目的地のシェラブツェ大学についたころには移動の疲れでへとへとになっていた。

3) ブータンで広島について話す

大学についたその日の夜は、ブータンの大学生たちに歓迎の言葉をもらい、ブータンの伝統的なダンスを披露してもらった。そのあと彼らと一緒に夕食を食べた。お互い英語で話したのだが、シェラブツェ大学の学生の英語が大変上手であること

に驚いた。それでも身振り手振りを駆使し、なんとか彼らと楽しく過ごし、仲良くなることができた。次の日の朝8時半、私たちはシェラブツェ大学の朝礼に出席させてもらい、そこで私たちの中から4人が代表して日本についてプレゼンテーションを行った(写真7)。私もその一人であったのだが、私は出身が広島ということで、広島原爆についての部分を担当させてもらった。私はこの時初めて、広島が世界でどれだけ有名な町なのかを肌で実感することができた。前に出て、“I’m from Hiroshima.”と言った時の講堂での学生たちの反応は、今も鮮やかに記憶に残っている。広島で生まれ、育ったということが何を意味するのか、初めてそのことに気付くことができた。今回は時間の関係と、私の力不足で粗末な内容に終わってしまったことが本当に悔しい。次にまた広島のことを紹介できる機会に恵まれたなら、今度こそは自分の知っていることを十分に伝えられるようにしたい。そのために英語の勉強はもちろん、まずは自分自身、原爆について勉強しようと決意した。自分からそのように思ったのはおそらく初めてのことである。非常に良い経験ができたと思った。

4) 現地学生とともに農村を見学する

その次の日から、シェラブツェ大学の四人の学生と数日間行動をとにした。5日から8日にかけて彼らとともに二つの行政村であるラディ、カリンという農村を訪れた。私が彼らと行動を共にした中で一番印象深かったのは、8日の午後ブータンの小学校を見学させてもらった時のことである。小学生であるにも関わらず、授業が英語でおこなわれていたことに驚いた。自分よりも何歳も年下の子供が自分よりもうまく英語を使っていることがショックであった。もちろんこの徹底した英語教育には、自国の文化や格差にかかわる様々な問題もあるのだろう。しかし、英語の勉強に四苦八苦している私からすればどうしても劣等感を覚えずにはいられなかった。9日にはタシヤンツェに行き、ブータンで一番大きいチオルテン(仏塔)を見に行った。その後、その日のうちにまたシェラブツェ大学に戻った。翌日もう一度朝礼に参加した後、彼らとこの交流を通して感じたことなどを議論した。そしてそのミーティングを終え、とうとう学生たちと別れる時となった。別れはつらかったが、再

会を約束した。次に会うときは自分ももっと流暢に英語を話せるようになっておきたいと思う。

5) 終わりに

私はブータンの人たちの人柄がすごく素敵だと思った。まったく面識のない私に対しても、素敵な笑顔で接してくれて、ほんとうによい気持ちになった。私がブータンの一番好きなところはこの国が人々の優しい、幸せな笑顔にあふれているところである。

また冒頭でも記したが、今回の研修で自分にとって一番よかったと思えることは、自分の大学生活を真面目に考え直すことができたことだと思う。大学一年の夏に、ブータンに行けたことは、本当に貴重で価値のあるものであった。これからは気持ちを一新して、全力で勉学に精を出す。英語や自分の専門分野はもちろんのこと、今回勉強の必要性を感じた広島原爆のことなども一生懸命に勉強して、海外でも堂々と発言していける人間になれるよう生きていきたい。

6. ブータンの自然と宗教

文学部2回生 諏訪雄一

1) はじめに

当然ながら、今回私は初めてブータンに行った。全行程は約二週間、その内移動などをあまり気にせず活動に専念できたのは、4、5日だろうか。いずれにしても私は今回、思っていたよりはるかに多くのことを知り、学ぶことができた。

2) ブータンの自然

ブータンについてまず言えるのは、緑が多いということだ。事前学習をしていたとはいえ、標高2～3000メートルと聞いてあまり綺麗な緑色は期待できないのかなと思っていた。しかし、空港で飛行機から降り立った瞬間にその考えは変わり始め、農村部で美しい棚田を見たときに完全に考えが変わった。百聞は一見に如かずとはまさにこのことで、ブータンの自然の美しさは文章でも会話でも写真でも伝わらないと思った(写真8)。確かにいたるところにごみが捨てられているし、それはかなり無視できない深刻な問題だと思う

が、そんなことなど気にならなくなる位の圧倒的な自然だった。正直これまで、環境保護だとか自然と共存だとかいう文句に胡散臭さを感じることも多々あったが、あの景色を見るとそれにも納得させられる気がする。データを取って色々と指数を作るのもいいけれど、生で自然を見て目の前のものが無くなることを想像するというのも、人を説得するのには効果的だと身に染みて分かった、貴重な体験だった。

3) ブータンの宗教

そしてもう一つ、ブータンの仏教について述べたい。正直に言って、ここまで仏教やその他の説話、伝承を聞けるとは思っていなかったの、私にとっては嬉しい誤算だった。日本の仏教はインドから中国に伝わった大乘仏教が平安、鎌倉期に日本風にアレンジされて、さらに時代の変化とともに日本独自のものになったが、ブータンの仏教はどちらかというとチベットに近い大乘仏教の密教で、同じ仏教とは思えないほど日本のものとは異なっていた。ブータンでは神自身が女であったり、神が自ら2人の妻を持っていたりする。そして、ラディの地域信仰ではチベットから来てその地域を征服した神を中心としている。名前をアマジョモと言い、時の王を殺せと民衆に唆して自らは信仰の対象になったという。ある宗教やそれを信仰する人々が侵略的であるのは世界史上でもみられるが、神自身がある意味暴力的なのは珍しいのではない。また、日本も（一応は）仏教国だが日常生活にはあれほど頻繁にデーモンは登場しない。ブータン人の言う「デーモン」が私たちのイメージするような西洋的な悪魔なら、いつどこからそのような概念が入ってきたのかは不思議である。またシェラブツェ大学の学生がタコは悪魔の化身であるというようなことを言って、タコにまつわる伝説も聞かせてくれたのだが、内陸国のブータンにタコがいるはずはないので、これもどこから伝わったのか不思議である。西洋ではタコは Devil Fish と呼ばれているそうだから、それらがまとめてインド経由で伝わったのだろうか。機会があれば一度聞いてみたい。

3) おわりに

これらは日本にいてもなかなか聞いたり経験し

たりできないことばかりで、しかも現地の人と直接接することができたというのはとても貴重だったと思う。そして、せっかく Facebook でブータンの学生と友達になり、彼らもまた日本に来てくれるそうだから、今回限りの経験で止めることがないようにしたい。ブータンと日本では同じような社会問題もあり、民族的に顔も似ているため、深く分かり合えることも多いだろう。最後に改めてこの講義に参加できたことに感謝して、私の感想文を終わろうと思う。

7. 秘境を訪れて

総合人間学部2 回生 長澤勇貴

1) はじめに

8月31日の朝、私たちを乗せた飛行機はパロ国際空港に近づいていた。私は、着陸間際になっても、飛行機の翼があたるのではないかとというくらい周りが山に囲まれている風景をみて、「ついにブータンに足を踏み入れるのか」と興奮していた（写真10）。今回は、こうしてブータンに足を踏み入れ、そこでの滞在中に経験し、その経験から感じたことを、文化、大学、実体験の大切さの三つの点から述べていきたいと思う。

2) 文化

シェラブツェ大学では、ブータンの学生たちによる踊りの披露や、礼儀、作法の講義などを通して、ブータンの文化について様々なことを教えてもらった。講義では、礼をする相手の身分に応じて礼の方法が厳格に決められていることに驚いた。このようにブータンの文化に触れ、ブータンの文化について知ることができたことはありがたいことであった。しかしその一方で、自分がいかに日本の文化について無知であるかということを感じた。日本には多くの伝統文化があり、それらの多くは私たちが実演するのは難しいものであるが、少なくとも日本語と英語で、自国の文化を説明できなくてはいけないと思う。また、文化の中で踊りというのは、一緒に踊れば言葉が通じない人とも親睦を深められる上に、覚えやすい踊りもある。そこで、私は伝統的な踊りを大勢で踊る機会を増やすなどして復興していくべきだと考え

る。実際、カリンに泊まった夜、ブータンの学生にブータンの踊りを教えてもらい、ラディでは多くのブータンの人と一緒に踊ったのだが、とても楽しい時間であったとともに、今まで以上に、彼らと気軽にコミュニケーションをとれるようになった。言葉を超えた、素朴だが深い交流であった。

3) 大学について

ブータンの大学では学生が全員参加する朝礼（アセンブリー）が週に4日開かれる。日本では学校の集会といわれると、先生方が話をし、それを生徒や学生が一方的に聞く形式が一般的だが、ブータンの朝礼はほとんど学生の手で行われている（写真11）。主な内容は、学生が一週間の出来事を英語で発表することである。私は、朝礼の制度から日本が学ぶことは多いと思う。自分自身、9月10日の朝礼で、シェラブツェ大学の学生とともにおこなったカリン、ラディでの研修内容を報告する機会をいただき、つたない英語ながらも発表をさせていただいたが、大勢の人の前で、顔をあげて英語で堂々と発表することの大変さを知った。今、日本の大学でリーダー教育やグローバル教育といえ、インターンシップや海外留学という風潮が少なからずあるように思われる。しかし、そのような活動をしなければリーダーになれるのだろうか。もちろん、インターンや留学は貴重な経験となるが、大学は大学内でできることをもっと考えるべきではないか。もし、朝礼のように大勢の学生の前で学生が英語で発表する定期的な機会があれば、日本の大学内でも国際社会で通用するリーダーとしての素質を養っていくことができるのではないか。

4) 実体験の大切さ

インターネットでブータンを検索すると、「幸福」「国王」「GNH」などという単語が続いて出てくる。多くの日本人がブータンと聞いて頭に浮かぶのは、大方このようなものだろう。私自身も今回のプログラムに応募するまでは、三年前のブータン国王来日以降、日本にブータンフィーバーが起り、「幸せの国ブータン」というイメージが日本に広まっていたせいかもしれないが、ブータンを桃源郷のような国だと思っていた。しかし、実際に現地に行ってみると、人々は笑顔で接して

くれ、親切で、実直な人が多く、日本でのイメージに近い国だなと思うことも多かった一方で、ブータンも過疎、離農の問題など日本と同じような問題に直面していることも分かった。9月6日に行ったカリンでの聞き取り調査では、村567戸のうち300戸は空き家であり、過疎、離農の問題が深刻であることがわかり、村を見学すると、休耕地が目立っていた。東部ブータンの過疎、離農の問題の深刻さを実感した。首都ティンブーが著しく発展していくなかで、多くの若者が快適な生活にあこがれて都市部に流出する現状では、休耕地が増え、廃村に追い込まれる村が現れてしまいかねないと感じた。当たり前ではあるが、現地に行かなければその国の実情は見えてこないということと、どの国も素晴らしい点ばかりでなく、必ず何か問題を抱えているということを痛感した。そして、メディアで伝えられている情報がいかに断片的なものかということも実感できた。

5) おわりに

自分の英語能力の拙さゆえ、ブータンの学生が言っている内容をすべては理解できなかったことが非常に悔やまれたので、今後早急に英語の勉強をしなければならないと感じた。また、ブータンの人々の自分たちの文化を守っていこうとする姿にふれ、日本の文化についてしっかりと勉強しなければならないと感じた。これからの大学生活で、ブータンでの経験を生かし、一つの尺度にとらわれず、様々な観点から物事を見られるよう勉学に励んでいきたい。また、帰路のバンコクへの飛行機に乗っていたインド人たちの熱気に負けないようなエネルギー学生生活を送っていきたい。最後に今回、ブータンに行く機会を与えてくださり、引率して下さった先生方にこの場を借りて感謝します。

8. ブータンの離農・離村問題について

農学部2回生 森田 椋也

1) はじめに

私たちは、ブータン東部の離農・離村の現状を知るため、9月の5,6日でカリンに、7,8日でラディに滞在した。



写真7 シェラブツェ大学の講堂で行った日本についてのプレゼンテーション



写真8 ラディの農村の美しい棚田。ブータンが標高差の大きい国だと分かる。



写真9 ラディのラカン（寺）Nam Druk Choeling 内にあるアマジョモの絵。白馬に乗ってチベットから移動する様子。（特別に許可を得て撮影）



写真10 トウモロコシ畑越しのラディの棚田



写真11 シェラブツェ大学の学生寮（下級生は4人1部屋）



写真12 カリンの村

2) ブータン東部の離農・離村の現状

実際にカリンの村に行ってみると、離農・離村の問題が深刻であると一目でわかった。カリン村には、民家や畑のそばに草原が広がっていたが、この草原はかつての開墾地なのだという。中には、四年前から開墾しておらず、それ以来ずっと草地として放置されている土地もあり、問題は急速に深刻になりつつあると感じた。空き家も多く見られた（写真12）。カリンで、まだ村に残っている村人に聞き取り調査をしたところ、農家の家計は国の補助金などのおかげでそこまで圧迫されていないと感じた。それでも村人が都会へ移住しようとするのは、仕事や、良い教育施設、良い医療設備などを求めるからであると住民は語った。日本の過疎地域も、救急車が到着するのに相当な時間がかかる場所がある。また、日本の若者が都会に移住する理由は主に教育や仕事のためであるため、この点は日本とブータンの共通点であると思う。聞き取りをした村人も、離農・離村はよくないことだと思いつつも、自分の子供には農家を継いでもらうのではなく、政府の職についてほしいと考えていた。離農・離村の現状を知ることができたのは、東ブータンでの一つの収穫だ。

3) 離農・離村問題に取り組む現地の人々

東ブータンの離農・離村に危機感を抱いて、自ら活動を始める人々もいた。9月6日にカリンでのフィールドワークで訪れた農業センターの若い男性は、農業普及員として村に新しい技術を伝える仕事をしていて、彼は、政府とは関係なしに、自分の考えでこれを始めたという過疎・高齢化が進む中で、このような若者の力は大きいと感じた。9月4日にはヨンプラ村の一人暮らしのおばあさんの家を訪ねた。ここの家の屋根は、最近になってシェラブツェ大学の学生によって修復されたそうだ。学生の話によると、シェラブツェ大学の学生は村で一人暮らしの老人の世話などもしているという。離農・離村の村に何らかの貢献をしようとするこれらの活動は大事だと感じた。日本ではこのような活動がブータンほど活発でないような気がする。見習うべきだと感じた。また、学校ぐるみでこのような活動することは、若者に離農・離村について意識させる良い機会にもなるため、良いことだと思う。

4) 守られるべきブータンの伝統文化

離農・離村が進み、ブータンの一次産業が衰えてしまうことは心配だが、離村によって、伝統文化が失われることも危惧するべきである。ブータンの住民や大学生と踊りなどを通して交流するなかで、ブータンには独自の素晴らしい文化があると感じた。日本はかつて海外の文化を受け入れて、自国の文化をないがしろにしてきた時代がある。私はブータンに、日本と同じ道をたどって、自国の文化を忘れてほしくない、と切実に思った。ブータンの人々には、自分たちの文化がどうあるべきか、しっかり考えてほしいと思う。

5) おわりに—これからの日本とブータンについて—

二週間のブータンの滞在のなかで、ブータンの離農・離村に立ち向かう人々に触発されて、私は9月27日に京都市の北部に位置する京北地域の離農・離村問題を考え、京北に貢献するイベントに参加した。この地域では、村ぐるみで子育ての充実を図ることで、高齢化に対応しようとしていた。また、農業の面では、ブランドの京野菜を導入して、農業の活性化を図っていた。京北地域で見聞きしたあらゆる工夫は、ブータンでは見られなかったものばかりで、大変驚いた。しかし同時に、ブータンで見られた離農・離村へのあらゆる対策も日本ではなかなか見られないものであった。両国ともそれぞれ創意工夫を凝らして離農・離村問題に取り組んでいるのだ。だから私は、ブータンと日本が互いにどのような方法で離農・過疎の問題に立ち向かうかとしているのかを学び合う機会があればそれは問題の解決につながるのではないかと思った。

9. 自分と向き合う16日間

文学部2回生 柳原志穂

1) 雄大な自然

ブータンに到着してまず感じたのは、月並みな感想かもしれないが風景の素晴らしさである。プムタン近くで目にした一面ピンクのソバ畑（写真13）、移動途中の山道で幾度も目にした雲海（特にドチュラ峠で108のチョルテンとともに一望で

きた風景は絶景であった）（写真 14）、雄大な山々…どれも筆舌に尽くしがたい美しさで、ブータンから帰国した今でも多くの風景がくっきりと思い出せる。移動途中に富士山ぐらいの高さを通るなど、標高が高く太陽が近いからか、空や自然がより明るく、色彩もより豊かに感じられた。また、それだけでなく空港の建物でさえ日本を含めた他国の無機質なものと一線を画した独特のものであり、目に入るすべての建造物にブータンらしさが表れていて、窓からのぞくだけでも楽しめた。

2) 臨機応変さ

他に印象に残っているのは、ブータンの方の臨機応変さ、懐の広さである。一日目を急ぎょティンブーで滞在することに変更したり、ラディにおいて、私が体調を崩したために、もともとはホールで泊まる予定だったところをゲストハウス泊に変更してくださったり、容易に予定を変更できるのは驚きであった。日本でも可能かもしれないが、そのためにはより煩雑な手続きを経なければならぬだろうし、嫌な顔をされるのは想像に難くない。それゆえ、その融通の利く対応はブータンの大きな長所の一つだと思う。

3) この旅の成果

今回の旅に自分なりのテーマをつけるなら、この文章の題名で表したように、自分と向き合う、ということであろう。

たとえば、今回、ブータンの歴史文化や農村、医療、国の抱える問題点など様々なことについて学んだ。しかし、私は完全には英語が聞き取れない、理解が追いつけていないという情けない状況であった。他国の問題点云々などと偉そうなことをいう前に、自分の英語力をあげるのが急務である。それと同時に、宗教に関する知識、日本文化に関する知識なども圧倒的に少ない。シェラブツェ大学の学生さんが宗教や文化の話をしてくださったり、伝統的な踊りを当然のように披露してくださったりするのを目の当たりにして、自分と比べて恥ずかしく思うばかりであった。これから様々な分野の本を読んだり話を聞いたりして、日本人として恥ずかしくない教養を付けないといけないと痛感した。

また、向き合うというのは上述のような自分の

知識不足という点だけではない。行程のおよそ半分を費やしたであろうか、長時間の車移動において自分自身と向き合うことができたのもある種の収穫の一つである。窓の外を眺めながら、様々なことを考えた。細切れに区切られている日常生活において途切れずに一つのことを考え続けるということは難しいので、貴重な時間を持てたと思う。

そして、これから一生付き合っていかなければならない自分の体。私はカリンの途中からラディまでの3日半、みんなと別行動であった。なんてことはない、体調を崩していたのである。高山病なのだろうか、それともただの旅疲れであろうか、熱があったわけではないが頭痛がひどく、立ち上がるのがきつかった。せっかくの貴重な時間を無駄に過ごしてしまったのである。こればかりは自分でどうにかできる問題でもないかもしれないが、まずは自分を過信せずそんなに強くないということのをわきまえて行動するところから始めたい。

4) おわりに

今回非常に貴重な経験をさせていただいたが、それを生かすも殺すも自分次第だと思うので、これから主体的に、そして積極的に毎日を過ごしていきたいと思う。

安藤先生、坂本先生、このプログラムにおいてお世話になったブータン人や日本人の皆様、本当にありがとうございました。

10. ブータンへの初渡航

総合人間学部3回生 酒井 肇

1) 風景

初めて訪れたブータンは、風景が本当に綺麗な場所だった。とりわけ東部で見た棚田は見事で本当に美しく、鉄塔の電線のない中での鮮やかな緑色の棚田には圧倒されるばかりだった。さらに日本にはない形の独特の寺も趣きがあり、見事な田園風景である。また、山道を走っているバスの窓から見える雲の絨毯もまた見事に広がっており、本当にいい場所だと感じた。

2) 公共政策的に興味深い

風景以外でも、公共政策や国際関係論を専攻し

ている自分から見ると、ブータンには興味深いことが多くあった。まず興味深かったのは、行政のレベルが高い点である。例えば、森の木を切るには役所の許可をとらないといけないため、山にはちゃんと森が残っており、またインドから大量に人が押し寄せないようにインド人労働者の管理もしており、関所では他の多くの途上国で要求されるような賄賂もなかった。また、医療費が無料であり、施設が比較的整っていることなどにも驚かされた。もちろん財政的に海外援助に依存しているなどの様々な問題を抱えているとは思いますが、その中でも精一杯の努力をしているという印象を受けた。

他に興味深かったのは、ブータン版の東大であるシェラブツェ大学ある。この大学はなんと首都から車で丸二日もかかるような辺鄙な山の中に立地していた。周りは、田んぼや森しかないような場所で本当に驚き、未来の官僚や指導層になる学生達がこういう場で学べれば、都会の価値観だけではない広い視野で物事を決められるようになるのだから、日本でもこのような取り組みがあればよいと思った。

3) ティンブーの大きさ

個人的な体験として一番面白かったのは、行きと帰りでの首都ティンブーの大きさの感じ方が変わったことだ。行き際に近くの山からティンブーを見下ろしたときには、京都の市街地を見下ろしたときのことを思い出しながら、やはり小さい都市だと思っていた。しかし、10日近く東部の農村部に滞在した後に帰りに立ち寄ったときには本当にティンブーが大都会に見えた。ブータン人にとってティンブーは特別な場所だ、と耳にしたことはあったが、その意味を少し実感できた気がした。しかし、さらにその後、日本への帰りにランジットで寄った広大なバンコク市街地を見た時には、やはりティンブーは平地の少ない小さな都市なのだ、と思い直した。こういった感覚は、首都に出たことのあるブータン人、さらには国外に出たことのある人とそうでない人との間で違うのではないかと思った。

4) もやもや

一方で、もやもやした感情を覚えることもあっ

た。それはインド人労働者を目の当たりにしたときである。ブータンには沢山のインド人労働者がいて、建設中の建物で働いていたり、山の中や大学の近くでも、道を直したりしているのも大概彼らであった。最初に首都のティンブーで泊まったホテルでエレベーターを修理していたのもやはりインド人だった。一方で、都市部では肉体労働を嫌うブータンの若者たちが失業していて、しかも政府が支援して若い彼らを中東などの海外に出稼ぎに行かせている。そのことを事前にオンラインの記事で読んでいた自分から見ると、インド人労働者が素手で重たい石を抱えながら道路を作っている姿はなんとも言えない感情を思い起こさせた(写真 15)。

5) 最後に—ブータンの今後と来年に向けて

ブータンが50年後、100年後にどうなっているのか、それはもちろんわからない。しかし、グローバル化や都市化などによってライフスタイルも変容していく中でも、上手に「大事なものを」残っていった欲しいと思う。個人的には、特にあの綺麗な棚田の風景が消えて欲しくないと思うとともに、生き生きとしたブータン人の姿が残っていてほしいと思った。

ブータンでの2週間は、本当に楽しく学びのある時間だった。また、幸運にも来年から半年間ブータンで失業問題に関して調査をする機会を与えられている自分としては、とてもいい下見にもなった。この経験を生かして来年に向けて準備をして行かなければと感じた。最後に、一緒に行ったメンバーと先生、シェラブツェの皆さん、国際交流課のみなさんに御礼を申し上げたい。

参考文献

- 1) The status of unemployment in 2013 KUENSEL ONLINE, <http://www.kuenselonline.com/the-status-of-unemployment-in-2013/> (2014年10月24日閲覧)
- 2) 本林靖久、高橋孝郎：『ブータンで本当の幸せについて考えてみました。：「足るを知る」と経済成長は両立するのだろうか?』CCCメディアハウス、東京、2013。



写真 13 一面のソバ畑（ブムタン）



写真 14 108 のチョルテンと雲海（ドチュラ）



写真 15 道路を建設しているインド人労働者



写真 16 カリンにおける景観。緑色の部分は耕作放棄地の畑である。



写真 17 ラディの棚田



写真 18 ラディにおける耕作放棄地

11. ブータンの農村における過疎と景観への影響

農学研究科修士1回生 谷悠一郎

1) はじめに

農学研究科では私は生活文化と農村計画についての研究を行っている。今回のブータン訪問では、生活文化が表象した例として農村部の景観に着目した。そこで、訪問したカリン・ラディという2つの農村について、離農が観光資源としての景観にどのような影響を与えるのかということについて考える。

2) 観光資源としての景観

営農形態に代表される、生業が景観と結びつく例として、日本では文化的景観をあげることができる。文化的景観は、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義される¹⁾。そして、景観を構成する文化もまた、観光資源や地域づくりとして活用される例を見ることができる。同様にブータンにおいても、自然のまま残り、営農形態、農村文化を表す景観を観光資源として活用、着目することができると思われる²⁾。

ブータンは観光立国としてハイエンドな観光政策に特化している。ブータンに入国した外国人観光客が主に注目するものは雄大な自然であり、先進国では見られない営農風景であり、山原に連なる棚田であり、伝統的な建造物である。この中で、棚田に代表されるような農村部の景観もまた観光資源として機能しうる潜在力を持つと考えられる。では、それらが現在そして未来において過疎の影響を受けた場合、どのような影響が生じるだろうか。

3) 過疎と景観に与える影響の実態

(1) カリン

東ブータンに位置するカリンは畑作の行われる地域である。畑では主にトウモロコシとジャガイモが栽培される。カリンでは、このような畑と点在する家々、そしてチョルテンが斜面に織り成す景観を見ることができる。

一方で、カリンでは約3割の家屋が空き家であ

り、耕作放棄地・休耕地とみなすことのできる耕地はおよそ5割にのぼると報告がなされている(安藤ら, 2014)。これらの耕作放棄地では、家畜が放牧されており、耕作放棄された畑に生える雑草を餌としている。このため、畑が耕作放棄されることで、直ちに自然に戻ってしまうということにはなっていない(写真16)。しかし、長期的な観点では、畑の面積の減少、空き家の増加による荒廃した家屋といった景観を構成する要素が増え、荒れた景観になりうる影響が懸念される。

(2) ラディ

ラディはカリンと異なり、山から得られる豊富な水を利用した稲作の村である。水田は小規模なものが山肌に棚田として存在し、それらが何層にも連なる景観をなしている。これらは今回の訪問でも「きれい」「すごい」といった印象を与えるものであった(写真17)。

しかし、ラディでも同様に過疎は進行している。調査からは集落に近く、水を得ることが難しい場所の水田から徐々に放棄されつつある印象を受けた。写真18では耕作放棄された棚田の写真を載せた。これらは日本と同様に畦が雑草で覆われ徐々に自然に戻りつつあると共に、田面では家畜である馬が放され維持されている部分も見られる。同様の耕作放棄が棚田で起きた場合、放棄地が徐々に自然にかえるとともに、山肌の棚田の部分が草で覆われ、森になっていくまでの期間、荒れた景観になることが考えられる。

4) ブータンの農村部の問題がもたらすもの

概してブータンの農村部が抱える問題は、日本をはじめ先進国ではかつてあった過疎・離農問題である。しかし、ブータンではその速度が速いということが問題となる。ブータンで離農過疎の問題が深刻化することで「食の安全保障」が破壊されるのではないかと懸念がある。しかし、私はブータンの農村から人がいなくなることで、田畑が荒れ、いままで維持されてきたブータンの農村部の景観が破壊されていくこともまた危機的ではないと感じる。

カリンで私たちが見た耕作放棄地は、牛が放牧されていることで草が生い茂ることなく、放棄された印象をあまり受けないものであった。しかし、

同時に放棄されて崩れかけている空き家を見ていくと、一気に荒廃した農村の印象を受ける。すなわちブータンの農村部の抱える問題は景観の破壊という形で徐々に「表出」しつつある。耕作放棄は、農地が自然に還るプロセスと見ることもできるが、それらを放置したままにしておくことは景観の荒廃につながり、それらは地域資源の喪失にもつながりかねないものとなる。

2011年よりJICAはポプジカにてエコツーリズムの実践を行っている。この結果、農家は観光客が泊まることで利益を得ることができ、経済的な自立につながる。また、農村部での生活の自立により、いままでの農村景観を守ることが可能となり、農村としての価値を保ち続けられる。ブータンの農村部はありのままで存在することでその価値を発揮する。そのような潜在力が過疎によってその価値を失っていくのはとてももったいないと感じる。

5) 最後に

私がブータンを初めて訪問した2013年1月、山肌から上まで延々と連なる壮大な棚田を見た。その日本にはない迫力にとっても感動したのを覚えている。雄大な景観はそれ自体が営みを象徴し、そして人々を感動させる。ブータンの農村には特にそういう力を持っていると私は考えている。

ブータンの農村の抱える問題、農民の意識は数十年前に日本が通ってきた道である。しかし、昔の日本と異なっており、農村をうまく価値付けすることで農村を守っていくことは可能になる道筋が少しずつ見つけつつある。そのような道筋をうまく政策に活用することでブータンの農村が守られていくことが期待されつつある。ブータンの今後は必ずしも悲観的ではなく、良い未来も待っていると信じている。

最後に、今回の国際交流科目への参加は京都大学東南アジア研究所の安藤和雄准教授、坂本龍太助教のご厚意があったのものであった。ブータンを再訪したいという私の夢を叶えてくださって本当に感謝している。また、14日間の訪問で盛り上がった10人の学部生みなさん、石本さん、本当にありがとうございました。

注

- 1) 文化財保護法第二条第1項第五号
- 2) 農村文化と景観の融合として、ポプジカ谷の農村とオグロゾルの飛翔で形成される景観が例として挙げられる。

参考文献

- 1) 文化庁文化財部記念物課監修：日本の文化的景観。同成社、東京、2005。
- 2) 日本建築学会編：未来の景を育てる挑戦－地域づくりと文化的景観の保全、技報堂出版、東京、2011。
- 3) 安藤和雄ら：東ブータンのカリン行政村における休耕地（栽培放棄地）。熱帯農業学会、2014。

IV. おわりに：同行教職員の感想

1. 自然の教材に触れて、生活を共にする

京都大学東南アジア研究所 研究員 石本恭子

1) はじめに

国際交流科目の引率として、安藤和雄先生、坂本龍太先生と、11名の学部生、院生さんとブータンを訪れる機会を得た。この科目の目的は、海外で研修を行い、現地の自然・政治・経済・文化・歴史などの事情を学ぶこと、現地の提携大学の学生と教員が、京都を訪問し日本について学び、グローバル化が進む世界の中で、多文化理解や外国語の習得、そして地球環境への理解を深めるところにある。

出国前は、一度は行ってみたいと思っていたブータン王国東部を訪れることができる楽しみと、「学生さんたちと、いったいどんな旅になるのだろう…。」と、若干の緊張を感じていた。学生さんたちは、学年も、学部も異なる集団であるが、ワイワイガヤガヤと楽しく過ごしていた。しかし、ときには羽目を外しすぎる場面もあり、彼らはこの旅の中でいったいどう変わっていくのかちょっと心配もした。

2) 自然の教材に触れて、生活を共にする

目的地のタシガン県までは、バスで2日間かか

る。移動中に見る様々な景色は、プータンを深く知る材料である。3800 m の峠を越えたかと思えば、熱帯林が生茂り、気温が急に高くなり、高低差によって植生や景観が大きく変化する。また、地域特有の農作物に触ったり、農業をしている人に話しかける。さらに、道路の状態、それを舗装しているインド人の存在など、社会的な状況も見えてくる。これらを肌で体験しながら、現地をよく知る安藤先生、坂本先生の話聞く。座学では体験できない贅沢な講義である。日が経つにつれ、メモを取る学生さんたちの姿に熱意が増していったように感じた。

村に行けば、大勢が泊れる宿泊施設はない。4 日間は、公民館を借りて、雑魚寝をした。トイレはあったが、お風呂はない。(お風呂に入りたければ、共同の水場で水浴びができる。) コンクリートの床に、薄いマットを敷き、シェラブで寝る。プライベートな空間はほとんどない。食事は、同行したコック数名が作ってくれ、みんなで輪になって食べる。寝食を共にすることで、日本人同士はもちろん、シェラブツェ大学から参加してくれた4人の学生さんやプータン側スタッフとの交流が自然と深まっていった。

3) おわりに

深夜の空港のベンチで数時間待ったり、一日中バスで山道を移動したり、炎天下の中を歩き回ったりと、旅の行程は、決して楽なものではなかった。身体的にも精神的にも辛いところがあったと思う。それでも、最後はみんな笑顔で旅を終えることができた。異国の文化に触れることで、その文化を理解することの大切さを知る。それと同時に自国の文化を知ることの大切さを気づかされる。もちろん、私も例外ではない。文化だけではなく、経済や社会などなど、日本と比較することでプータンを知り、プータンと比較することで日本に対する考えが深まる。プータンでの異文化交流科目には、このようなことがいっぱいちりばめられていた。短い時間ではあったが、プータンの文化や、シェラブツェ大学の学生さんや村人との交流を通じて、出発時よりも一回り、二回りみんな成長したように見えた。これからもこの旅と一緒に過ごした仲間とのつながりを大事にもらえたらと思う。このような機会を与えていただい

たことに感謝する。

2. プータンを体感する科目を

京都大学白眉センター 特定助教 坂本龍太

本プログラムで、学生たちはレモングラスの葉を擦って匂いを嗅ぎ、五葉松の葉を手のひらにのせ、イトスギの幹に耳をあて、道路拡張工事のために1時間以上待ちぼうけをし、ミタンとウシを掛け合わせたジャツァムが土地を耕す光景や中学生が自分よりも高度な英作文を書いている現場を目の当たりにした。水道から流れる濁った水で洗濯をし、診療所の分娩台に触れ、土地に伝わる女神アマジョモ、男神ダンリン、僧侶ギャルセ・ガナパティなどの話に耳を傾けた。そして、シェラブツェ・カレッジの朝礼(アセンブリー)では学生たちが大勢の人の前に出て堂々と語る演説を聴き、自分たちもその舞台に立った。シェラブツェ・カレッジの学生との共同生活の中で、彼らが自分の食器を持参して、料理や物資の運搬の手伝いに勤しみ、食事の際は自分達が先に食べ始めようとしないことに気づいたはずである。個々の学生によって受けた印象は様々であると思うが、現地でのワークショップや帰国後のミーティングで聞えてきたのは、プータンで接した人間の柔軟性や思いやり、礼儀正しさ、英語力の高さへの賛辞であった。また、水やトイレなどの衛生面、道路の状況など改めて日本の良さを見直したという意見もあった。そんな中で最も多かった意見はプータンの学生が自国の文化をきちんと守っているという指摘であり、シェラブツェのほぼ全員が自然に伝統の踊りを舞うことができるという事実が強く心に残ったようである。いい面も悪い面もあると思うが、プータンでは英語教育が小学校から徹底されており、シェラブツェの学生の英語のレベルは大部分の京大生をはるかにしのぐ。国際舞台に出たときに、英語力や専門性もさることながら、自分が自国で培ってきた文化を体現することの重要性を実感したのではないかな。私もそれを痛感した一人である。シェラブツェの学生からは、村で日本の学生とともに生活する中で自国の農村の持つ価値を再認識したという意見がみられた。このプログラムは、学生のみならず、教員にとっても、

ブータン、日本両国にとっても非常に有意義なものであると私は確信している。シェラブツェ・カレッジは、1968年にパブリックスクールとして設立され、1976年に短期大学となり、1983年にデリー大学所属のカレッジとなり、2003年6月よりブータン王立大学の所属となった。その使命は、一般教養や科学を注入したGNH（国民総幸福）教育や人類発展への研究を通じて、国造りや社会経済発展に貢献することである。今回の旅で私の中で一番印象に残っているものは、学生たちが国の垣根を越えて、雑魚寝をしながら笑い合っている姿である。将来を背負って立つことになる両国の学生が若いうちから親交を結ぶことは、両国およびその他の国々に暮らす人々にとってかけがえない財産となるであろう。

Summary

Report of conducting Mutual Enlightening Practice-oriented Area Studies by Overseas Study Program “An Alternative Approach to Development: Learning from Rural Bhutan” concluded (30 August–14 September 2014), Kyoto University

Kazuo Ando¹⁾, Ryota Sakamoto^{1, 2)}, Yasuko Ishimoto¹⁾, Yuichiro Tani³⁾,
Kodai Kinoshita⁴⁾, Naha Takashima⁵⁾, Takuya Takahama⁶⁾, Mutsumi Fukuda⁷⁾,
Akinori Miyamoto⁸⁾, Yuichi Suwa⁴⁾, Yuki Nagasawa⁷⁾, Ryoya Morita⁸⁾,
Shiho Yanagihara⁴⁾, Jo Sakai⁷⁾

1) Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Japan

2) Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University, Japan.

3) Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Japan

4) Faculty of Letters, Kyoto University, Japan

5) Faculty of Law, Kyoto University, Japan

6) Faculty of Economics, Kyoto University, Japan

7) Faculty of Integrated Human Studies, Kyoto University, Japan

8) Faculty of Agriculture, Kyoto University, Japan

Eleven students and three faculty members of Kyoto University visited Trashigang District of the eastern Bhutan from August 30 to September 14, 2014. They participated in the classes of history, Driglam Namzhag (Bhutanese Etiquette), and dance at Sherubtse College, located in Trashigang District. The Kyoto university students with the four Sherubtse college students together conducted field studies in the villages of the up-land crop fields in Khaling Gewog, and the villages of the rice fields in Radi Gewog. They visited farmers' houses and the several local institutions such as Trashigang Dzong & Gewog offices (government offices), Renewable Natural Resources Extension Centers (RNR-ECs), Basic Health Units (BHUs), and Lhakhangs & Gompas (temples). Throughout the study tour, dynamic changes of climates, vegetation, and livelihood were observed in the altitude range about 900 – 3800 m. They listened to the stories from the villagers about depopulation, health care system, Ama Jomo & Meme Dangling (local deities), Gyalse Ganapaty (who is believed to be the first reincarnation of Jampel Dorji, the son of Zhabdrung Ngawang Namgyel), and so on. After the study tour in Khaling and Radi, they delivered a speech at the morning assembly and held a workshop among the study tour participants including four Sherubtse college students, at Sherubtse College. The speech and workshop were conducted in English for stimulating the mutual understanding between the Kyoto University students and the Sherubtse College students. They fostered friendships by sharing the experience of the field study particularly. This report is the record to show the impressions and comments which the participants in the study tour in Bhutan obtained on the basis of the facts. This study tour is a trial of Mutual-enlightening Participatory Area Studies, which the Practice-oriented Area Studies have been aiming for. objecting. The reports written by the students become a result of Mutual-enlightening Practice-oriented Area Studies by a unique comparative study on thinking-way and behavior of Bhutanese young people about the area traditional culture such as culture and religion through communication with the Sherubtse college students by sharing consciousness of “a person concerned” as a university student. The titles of each report are followings; Introduction: Background & Objective of Overseas Study Program “An Alternative Approach to Development: Learning from Rural Bhutan” and Significance of this paper (Kazuo Ando), “The happiest country in the world” (Kodai Kinoshita), “Impressions from 2weeks field trip in Bhutan” (Naha Takashima), “Now and the future in Bhutan” (Takuya Takahama), “Comparison of Bhutan and Japan” (Mutsumi Fukuda), “My trip to Bhutan” (Akinori Miyamoto), “Nature and Religion in Bhutan” (Yuichi Suwa), “Visit to unexplored region” (Yuki Nagasawa), “Depopulation problem in rural Bhutan” (Ryoya Morita), “See myself as I am” (Shiho Yanagihara), “First Visit to Bhutan” (Jo Sakai), “Problems of rural landscape in Bhutan” (Yuichiro Tani), Closing remarks: “Touch with nature and spend time together” (Yasuko Ishimoto), “Curriculum to look, listen, and feel Bhutan” (Ryota Sakamoto)